

# 博士學位論文要約

論文題目： 谷崎潤一郎の〈メルティング・ポット〉  
——大正・昭和初期の作品における越境的美学——  
氏名： グレゴリー・ケズナジャット

## 要約：

谷崎潤一郎に関する研究において、作家が若い頃に西洋の文化や文学に対して深い憧憬を抱いたということは、デビューして間もなく既に指摘されており、現在においてもなお自明の理として言及されることが多い。〈西洋〉という言葉を特定の地域で生産された文化体系という意味として用いることが問題性を孕むことは言うまでもないが、当時の日本では〈西洋〉なるものに対して谷崎に限らず多くの作家の意識が強かったということを考慮しよう。谷崎がエドガー・アラン・ポーやチャールズ・ボードリエールなどといった西洋諸国の作家から影響を受けたのも事実であり、その意味においては〈西洋〉と谷崎潤一郎との関係を考察することは確かに従来の研究で成果を生み出してきた。しかしこの論じ方はまた欠点を含む。谷崎の作品における要素を西洋的、あるいは日本的と区別してしまうことで、その二つの範疇に当て嵌まらない、曖昧なものが失われてしまう危険性がある。

本論は大正時代から昭和初期にわたって発表された谷崎潤一郎の作品における〈越境性〉を検討することを目的とする。かつて作家のスランプと呼ばれたこの時期の再考は近年において五味淵典嗣や柴田希などの研究者によって盛んに行われているが、本論で取り上げる理由はそれのみならず、のちに谷崎の〈日本回帰〉と呼ばれた作品群の創作へ至る時期と思われるからである。

〈越境性〉は近年において多岐にわたる研究に関連づけられつつあるやや曖昧な概念であり、従って完全な定義は提供し難いのである。本論において〈越境性〉を用いるにあたり、まずは便宜上、暫定的かつ相対的な定義を与え、以下の章において谷崎の作品における具体例を辿りながらその定義を敷衍させるアプローチを採用する。

〈越境性〉(transnationalism)とは、普段は個別に扱われがちである異なる文化や異なる言語の間において絶えず行われている交流や相互的侵出を前景化するために用いられる概念である。具体例を挙げると、第二章において谷崎の小説「独探」に描かれている人物「G氏」は、オーストリア人でありながら日本に住処を置き、主人公が期待する典型的な西洋人らしい振る舞いを見せることもなく、しかし一方日本文化に完全に馴染むこともなく、境界に括られたその二つの文化では捉えきれない者の存在を明示する。従って、〈日本〉と〈西洋〉という、谷崎が多くの作品に用いた二項対立が曖昧化され、脱構築される結果となる。谷崎の作品の一つの特徴と言われるこの力学は、以下に示すように先行研究においても意識されてきたものの、多くの論は谷崎潤一郎自身の西洋に対するコンプレックスや、関西移住以後に表れた、日本の土着文化への憧憬、などといった、やや固定してしまった定説に還元させてしまうのが現状である。それに対して本論はその力学自体を中心に置く。

また、〈日本語文学〉（および〈越境文学〉）と称された作品の研究は近年において注目を集めつつある。旧日本帝国の外地で書かれた日本語の作品、日本を出てハワイやブラジルに移転した移民のコミュニティーで生まれた作品、及び在日する外国人や日本語の非母語話者によって著された作品などを対象として取り上げることにより、この種の研究は、主に日本語を母語とする、日本人男性の作品、即ち日本近代文学の〈聖典〉を中心に行われてきた従前の日本文学研究を相対化することを目的とする。しかしこの研究はまたある危険性を孕んでいることを無視してはならない。従前の日本近代文学研究という事象に対して〈日本語文学〉が周縁的に位置されると、狙われる〈日本文学〉の脱構築が果たされないばかりでなく、むしろ主要の〈日本近代文学研究〉の優位に意図せずにも加担しかねない。

本論は上記の問題を解決することを試みる。〈日本近代文学〉の「文豪」と言われる谷崎潤一郎を意図的に対象として取り上げ、〈日本語文学〉研究で作り上げられた方法論やツールを活用することにより、日本文学の〈聖典〉を〈日本語文学〉と同様に考察したい。その結果として、〈日本語文学〉と言われる作品の賞賛に繋がる要素はより一般的な〈文学らしさ〉そのものにも密接に結びついていることを明確にし、新たな批評軸を定義することを目指す。

具体的には本論は次の構成となる。各章はそれぞれ谷崎潤一郎の作品を題材として、作中の越境性を提示する。

第一章は谷崎の初期作品である「少年」（「スバル」一九一一年六月）を論じる。「少年」は、作家のそれ以前の小説と同様にファム・ファタルの美、〈江戸・西洋〉の対立、〈現実・異界〉といった観念を用いつつ、鮮明な感覚的描写を導入することによって以前の観念性を肉付けした作品であると言われてきた。作家自身にも初期作品の中で「一番キズのない、完成されたもの」（『明治大正文学全集』一九二八年二月一五日）と評された作品である。

「少年」の特徴といえる感覚的描写は読者の感覚に強く訴えかけ、作中世界に実感を与えるが、一方で結末における西洋館の場面がその実感を転覆させ、感覚の信頼性に疑問を呈示する。第一章においてはこの感覚的描写に注目し、少年である主人公、二十年後に執筆している語り手、そしてそのテキストを受容する読者がそれぞれテキスト内に立ち現れる身体と如何に関連するかを検討する。主人公が海外文化に対して示す憧憬と、その憧憬が最終的にもたらす感覚の破綻が以降の谷崎文学に見られる越境性に繋がる可能性を考察する。

第二章は大正時代のマイナー作品である「独探」（「新小説」一九一五年十一月）を論じる。作家自身と思しき主人公・タニザキと知り合いのオーストリア人・G氏の関係において、越境者のみに可能となる遠近法に対する作者の興味の芽生えが窺えることを証明する。この章は「独探」を作家の〈西洋崇拜〉という定説から切り離すことを試み、当時のメディアにおける〈独探〉の定義を検討した上で、独探小説という同時代的なジャンルの特徴を明確にし、その文脈において谷崎の「独探」の独自性を考察する。谷崎潤一郎が「独探」で描いたのは〈日本・西洋〉のルーブリックでは捉えきれないものであり、むしろ、この作品の核心にその二項対立自体を反覆させる越境性が窺えると提案する。

第三章は「メルチング・ポット」という表現の同時代的意味を再現することで「魔術師」（「新小説」一九一七年一月）の新たな解釈を導く試みである。具体的に、十九世紀と二十

世紀初頭の西洋文学における〈メルティング・ポット〉の概念に注目する。異なる言語と文化の混合に対する意識は、谷崎潤一郎の大正期作品に通底するものと言えよう。「人魚の嘆き」や「ハッサン・カンの妖術」など、不思議な異国を舞台とする物語のほか、「独探」のように、東京という身近な場面で同じ問題を取り上げる作品も発表する。これらの作品においては、文化や言語が交錯し、溶解する過程を描く空間として、浅草、殊に浅草公園六区が現れる。谷崎に「メルティング・ポット」と呼ばれたこの特殊な場所はまさに文化交流の実験台として機能する。「六区より六区らしい」所を舞台とする小説「魔術師」では、作家の〈メルティング・ポット〉のイメージが極端なまで描出される。人種、階級、性別、あらゆる差異を融合させる魔術師は、その〈メルティング・ポット〉の権化であると言っても過言ではない。しかし〈メルティング・ポット〉を単なる「坩堝」と解釈しては捉え切れない要素も作中に残る。この章においては谷崎潤一郎の作品におけるエドガー・アラン・ポーの影響を再検討し、その上で〈メルティング・ポット〉の概念を用いて、谷崎の大正期作品における言語と文化交流を考察する。

第四章で取り上げる「痴人の愛」（「大阪朝日新聞」一九二四年三月二〇日～六月一四日、「女性」一九二四年一月～一九二五年七月）は、以前に述べた谷崎の〈西洋崇拜〉の「頂点」と言われてきた作品である。その評価の意味と、先行研究にもたらした影響を考察して、作中における英語教育の場面を取り上げ、中村光夫などの評論家が示す〈西洋〉に対する〈理解〉の形と、作品に書き込まれた〈理解〉を比較する。体系的な〈知識〉と、断片的な情報との間の緊張感は、この作品の理解には重要なのではないかと思われる。たとえば、中村光夫の評論をはじめとして、谷崎に関する論考によく見られる括弧付きの〈西洋〉の概念は前者に当て嵌まるとすれば、「痴人の愛」に描かれている雑種的な文化の断片はおそらく後者に入ると言えよう。これはまた物語の内容にも現れる。たとえば、讓治が英語教育に対して示す考え方と、ナオミのそれとである。そして、最後に、讓治のナオミに対する見方に関連して同じ関係が物語の文体にも現れる。

第五章は「蓼喰ふ蟲」（「大阪毎日新聞」一九二八年一二月四日～一九二九年六月一八日、「東京日日新聞」同～六月一九日）における〈パフォーマティヴィティ〉を検討することを試みる。初期作品「秘密」から晩年の「鍵」に至るまで、登場人物の〈実像〉と〈パフォーマンス〉との間の自覚的なずれによって生じる緊張感は、谷崎の多くの作品において重要な役割を果たす。中でもこの要素を最も顕著に示すのは一九二八～一九二九年に発表された小説「蓼喰ふ蟲」である。「老人ぶるのは（略）一つの趣味」である義父や「埃くさいぼろのような」和服を「いやいやながら着せられ」るその妾・お久、「肌の色の白皙でないのを隠」し出自を伏せる娼婦・ルイズ、そして近代的で幸福な有閑階級の一家を演じる斯波家の三人など、作中の登場人物が行う〈パフォーマンス〉は常に語り手の注目を浴びる。それぞれの多面的な演技はその素朴な物語に深みを与え、プロットの展開に頼った「痴人の愛」や「人魚の嘆き」など、それ以前の谷崎の作品と一線を画する。なお、「蓼喰ふ蟲」における「人形」などを論じてきた多数の先行研究にこの課題に触れるものもあるが、〈パフォーマティヴィティ〉の観点から作品を解釈したものは未だに見られない。登場人物の演技と人形浄瑠璃の場面を取り上げ、それらの要素は物語にどのような影響を及ぼすかを明らかにする。その上で〈パフォーマティヴィティ〉の概念を援用しながら作中における

文化とアイデンティティを考察し、谷崎の「モダニズム」と「古典回帰」の蝶番としてのこの作品の位置を再考する。

第六章は観点を変えて、別種の〈メルティング・ポット〉である「世界文学」に入っていく谷崎潤一郎の作品を考察する。一九五五年に発表された「陰翳禮讃」（「経済往来」一九三三年一二月～一九三四年一月）と「蓼喰ふ蟲」の英訳に至る過程を検討する。二作における〈日本〉像は、戦後アメリカで流通した〈日本〉像と同様に一九世紀のオリエンタリズムに基づいたものであることを指摘した上で、翻訳者エドワード・サイデンステッカーと編集者ハロルド・ストラウスが定義する「翻訳に値する日本文学」を確認し、当時の英訳はどのように読まれたかについて考察する。越境的な美学から生まれた谷崎の作品における文化的多元性が隠蔽され、英語のコンテクストの中では「純粋な」日本文化の表象とされるアイロニーを指摘する。

ここで集めた研究に通底するものを簡単に表すと、谷崎文学におけるあるベクトルである。大正時代から昭和初期までの谷崎潤一郎の作品に〈西洋崇拜〉から〈日本回帰〉への移動と読まれてきた力学は、より適切に表現すると、〈完成の不可能性〉から、〈断片の美学〉への動きであると主張したい。過程は同じであるが、着目点こそが変わる。

〈完成の不可能性〉を描く谷崎の作品は、一九世紀アメリカの作家が想像した〈メルティング・ポット〉と同様に、常に一点に集中化しつつあり、物質性を超越しかけている。ところが、その最終的な極点に決して達しない。〈メルティング・ポット〉はあくまで統制的な役割を果たすのである。

「少年」の場合、その力学は主人公を西洋館まで運んでいく。光子に圧倒され、感覚を破綻された〈私〉の目の前に男と女、物質と抽象、西洋と日本、現実と芸術、あらゆる二項対立が崩れ、〈私〉は宙吊り状態の曖昧性を味わう。

「独探」においてはG氏が宙吊り状態の曖昧性を体現する。第二章で論じたように、語り手のタニザキを魅了されるのは実際の西洋でもなく、日本における西洋の言説でもない、G氏や、ロシア人女性が代表する越境性そのものである。

「少年」と同様に「魔術師」は、あらゆる境界が無効となる空間の中心へ進む主人公を描く。谷崎が〈メルティング・ポット〉の修辞法を利用したことは、アメリカにおける文化交流言説に対する意識を示唆する。この意味において一九世紀・二〇世紀のアメリカにおける〈メルティング・ポット〉は谷崎文学における越境性を理解するために有用なツールであり、実際に谷崎の作品に影響を及ぼした可能性も高い。

「少年」における感覚的描写といい、「独探」におけるG氏の正体といい、「魔術師」における主人公の変容といい、注意すべきなのは最後の破綻である。その破綻が代表する、〈完成の不可能性〉は谷崎作品に共通する美学に不可欠であると言っても過言ではない。

「痴人の愛」以降の作品に、このベクトルが変化を見せ、〈断片の美学〉が現れる。第一章～第三章で取り上げた作品は、主に破綻に進む過程自体を描くのに対し、「痴人の愛」は破綻した断片そのものの美学に着目する。「痴人の愛」において、譲治が好む体系的な知識のあり方に、ナオミが示す、繋がりのない、断片のままとしての知識が最終的に勝る。

「蓼喰ふ蟲」は固定した体系から解放された文化的断片の可能性を示す。要とその他の登場人物にとって文化は衣裳であり、どの文化の〈パフォーマンス〉を演じるかは本人の自

由とされている。最後に要が義父のような、古式な生活と「お久」のような妾を選ぶことが仄めかされているが、それは〈西洋〉からの回帰ではなく、意識的に〈西洋〉の衣裳から〈日本〉の衣裳に替えるという行為である。

この意味で、意識的に選択された自国の文化を演じることの実践は「陰翳禮讃」である。長年続いた谷崎の越境性とのやりとりによって生まれたこの作品が、英訳過程を通して「純粹な」日本文化の表象として解釈されるという皮肉な結果となった。この形で、谷崎の作品は「世界文学」という別種の〈メルティング・ポット〉の中でもう一つの文化の断片となる。

〈主な引用文献・参考文献〉

- ・谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』全三〇巻（中央公論社 一九八一年五月二五日～一九八三年五月二五日）
- ・エドワード・サイード（今沢紀子訳）『オリエンタリズム』（平凡社 一九九三年六月三〇日）
- ・西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』（中公叢書 二〇〇三年七月二五日）
- ・野崎敏『谷崎潤一郎と異国の言語』（人文書院 二〇〇三年六月二〇日）
- ・千葉俊二、アンヌバヤール・坂井編『谷崎潤一郎 境界を超えて』（笠間書院 二〇〇九年二月二八日）